

## 房総半島南部千倉層群は付加体か地すべりか

Is the Chikura Group in the southern Boso Peninsula, Japan, an accretionary prism or submarine landslide bodies?

# 村岡 諭 [1]; 小川 勇二郎 [2]

# Satoru Muraoka[1]; Yujiro Ogawa[2]

[1] 筑波大・生命環境・地球科学; [2] 筑波大・生命環境・地球進化

[1] Geoscience, Univ. of Tsukuba; [2] Earth Evolution, Univ. Tsukuba

付加体と海底地すべり岩体の先端部の構造は非常に似ている。それ故に、過去の例では付加体と地すべり岩体を区別するのは容易ではなかった。我々は付加体か地すべりかという決着がついていない房総半島南端に位置する千倉層群の地質構造について、主に野外での調査・観察を基に議論を行った。千倉層群は鮮新世に堆積した地層で、主に火砕性の砂岩シルト岩互層からなっており、様々な層中に凝灰岩や凝灰角礫岩、混在岩が挟在している。最下層には伊豆弧由来の茶褐色凝灰角礫岩があり、海溝充填堆積物と指交構造の関係にある。さらに、下位層には液状化した貫入岩体が数箇所で見られ、それらは、石灰質でシロウリガイを含むもの含まないもの、整然層のブロックを取り込んでいるもの、混在岩相になっているものと様々である。また千倉層群では複雑な地質構造が見られる。千倉層群全体では複向斜を形成しており、褶曲構造の中に褶曲構造がある複褶曲構造が見られる。褶曲のオーダーは3つで、褶曲の波長が500 m ~ 数 kmを示す褶曲、波長が50 ~ 100 mの非常に短い褶曲、三つ目に翼間隔が70°を超える緩い褶曲がある。その北翼は千倉層群下位の付加体とされる三浦層群と不整合で接している。また、千倉層群の地質構造には数多くの逆断層や褶曲、スラストアンチクライン、レイヤーパラレルフォールトを伴ったデュプレックス構造が至る所で観察されている。

このように千倉層群には付加体を特徴づける構造が数多く観察されているにもかかわらず、過去の研究例では地すべり岩体であるとされている。地すべりであるという理由は千倉層群の堆積場を陸側斜面であると考えているからであるが、その根拠が解決されていないままである。一方、付加体であるとする堆積場は海溝ということになる、我々は千倉層群の地質構造を中心に、詳細なマッピングを行い千倉層群の形成過程、つまり、どこで堆積し、どのような変形を受けたのかを考察し、また、潜水艇「しんかい6500」を用いた南海トラフ付加体での潜水映像との対比からの検討も同時に行った。その結果、土石流等の地すべり堆積物は含まれているものの、層内の一部に限られているということ。スラストの前面が崩壊したような構造は見出されていないこと。つまり、スラストは地層の内部で生じているということ。また、南海トラフの現世付加体と酷似し、シロウリガイや石灰質のセメント岩が含まれている層準が多い点でも南海トラフと類似している。以上のことから、少なくとも調査を行った千倉層群南部、つまり、千倉層群下位においては付加体内部を見ていると考えられる。そして、地すべり堆積物を層内の一部で見られることから、地すべりを伴った付加体ではないかと推察した。